

「神功皇后伝承と万葉歌」

ちんかいせき

〈鎮懐石伝説〉

伝説は、歴史上の人物や具体的な事物・事件などに関する信仰的言い伝えである。万葉集には伝説に寄せてうたわれた歌がある。

九州に伝わる伝説歌の一首に神功皇后おきながたらしひめのみこと（息長足日女命）が新羅征伐の時、神功皇后の子である応神天皇が生まれるのを鎮めるために裳もの腰に入れた二つの石「神功皇后の鎮懐石伝説」にかかわる歌がある。（「万葉集を知る事典より」）

作者は山上憶良やまのうえのおくらの作と伝えられてる。憶良が筑前国守ちくぜんのかみ（現福岡県北西部を占めた旧国名「筑前」の国司の長官）であった頃、「那珂郡伊知郷簔島なかのこほりい ちのさとみのしま（現在の福岡市博多区美野島―旧町名「簔島」辺りと推定されている。）」に住んでいた建部牛麿たけべのうしまろ（伝不詳）という人から、鎮懐石の伝説を聞いた山上憶良は、天平元（729）年末頃、序文を添えた長歌と反歌から成る鎮懐石の歌を作った。その序文に鎮懐石いわの謂れを述べている。

○万葉集で詠われている鎮懐石伝説地はJR筑肥線（福岡―東唐津）「筑前深江駅」から唐津方面に国道202号線（旧唐津街道）を西へ約1km徒歩で10分程度行くと右（北）に夏は海水浴客で賑わう深江海水浴場の砂浜がある。この砂浜の南側にあるJR筑肥線の線路を渡ると前方に小高い丘が見える。この丘の上に『鎮懐石伝説』が伝わる鎮懐石八幡宮本殿が建てられている。所在地は福岡県西部に位置する糸島市二丈深江字萩ノ原こぶがはら（通称、子負ヶ原）にある。

【鎮懐石八幡宮本殿】（中腹地展望所付近から丘上にある本殿を描く。）



○境内前には細い古い道が東西に通じている。この道が古代の官道跡で平成九（1997）年に鎮懐石八幡宮の東南へ約1kmのところで見掘された深江うまや駅家跡（平成十一年に保存整備された塚田南遺跡万葉公園が推定地。Ⅱ「駅家は古代官道沿いに約16kmごとに置かれた施設。」）につながる官道跡の一部と推定されている。この境内前の道を『九州万葉散歩―筑紫豊著』には古人が鎮懐石を『公私の往来に馬よりおりてひざまずき拝んだ』古道であると記している。

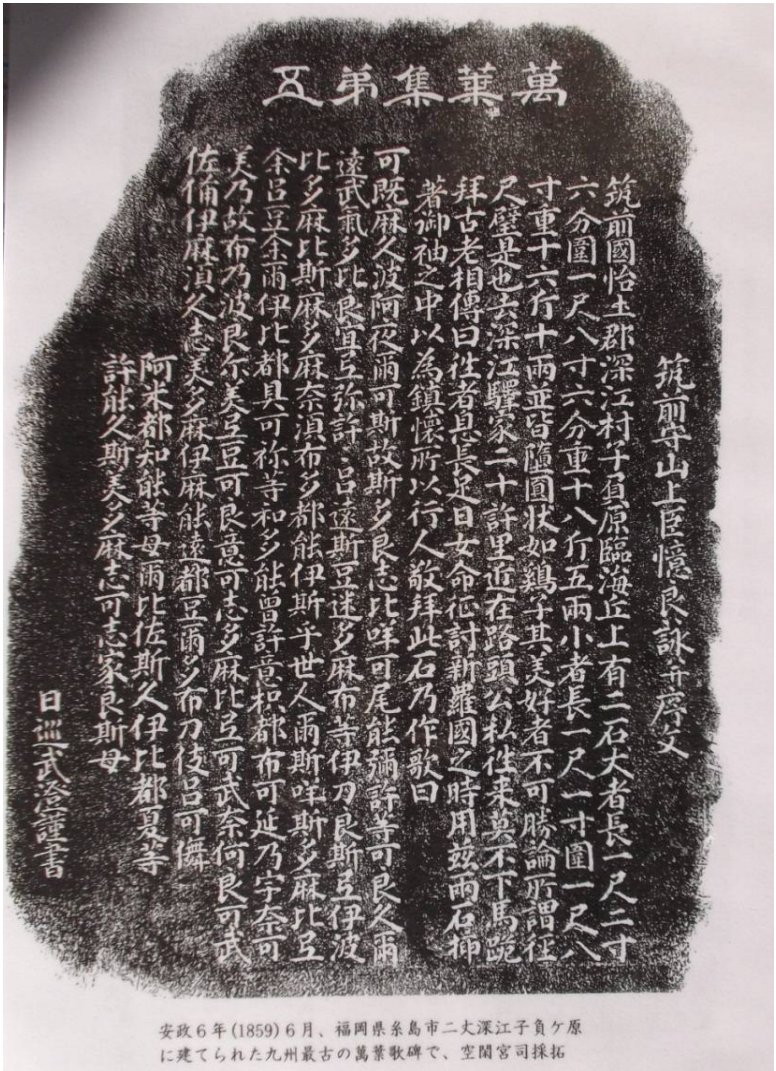
○本殿へと上る石段の手前右側に楕円状の自然石に刻まれた「鎮懐石万葉歌碑」とその左側に鎮座の由来を書いた「鎮懐石碑」が建っている。

この「鎮懐石万葉歌碑」は、安政六年（1859）六月に建てられた『九州最古の

万葉歌碑』であり、書は、深江在住の豊前中津藩儒学者日巡武澄ひよしただけずみによるものである。

碑面は、万葉集に所蔵の鎮懐石を詠じた山上憶良の作と伝えられる歌詞と序文を流麗な書体で刻まれている。

【右の碑面拓本は鎮懐石神社空閑宮司作成】



○序文には鎮懐石の形状。所在地、並びにその縁起が次の内容で刻まれている。

(序文)

筑前国怡土郡深江の村子負いとのこほりふかえの原こぶに海に臨める丘の上に二つの石があり。大きな

は*①長さ一尺二寸六分(およそ37センチ) 囲み一尺八寸六分(およそ56センチ)

重さ十八斤五両(およそ12・3キログラム) 小ききは長さ一尺一寸(およそ33セ

ンチ) 囲み一尺八寸(およそ55センチ) 重さ十六斤十両(およそ11キログラム)。

ともに楕円にして、状鷄子の如し。其の美好しきこと、論あげつちふに勝たふ可べからず。所謂いはゆる

径尺の璧けいしやく たまこ是なり。…*②深江の駅家を去ること*③二十許里にして、路の頭りばかりに近く在

り。公私の往来に、*④馬より下りて跪をろが拜をせずといふこと莫なし。古老相伝あいつたえて曰いはく、

「往者、*⑤息長足日女命、新羅の国を征討し給ひし時に、茲の両つの石を用て、御袖の中に挿着みて、鎮懐と為し給ひき。(実は御裳の中なり。)所以行人此の石を敬拜す」といへり。乃ち歌を作りて曰く、

(参考) 神社の説明書によると左の通り。

①二つの石の「長さ・囲み・重さ」に異なつたとなつた説がある。

②「深江の駅家」の位置は古くから謎とされてきたが鎮懐石伝説が伝わる鎮懐石八幡宮から南西約1キロの位置で古代の官道と大型建物跡などが発掘された「塚田南遺跡万葉公園」を『深江の駅家』推定地と考えられている。

③「二十許里」里程は諸説があり特定できない。

④「馬より下りて跪拜せず」馬よりおりてひざまづいた所は鎮懐石神社前古道。

⑤「息長足日女命」は仲哀天皇妃神功皇后のことであるが、神話伝説上の人物とされる。

「万葉集」の巻五の目録に、「山上憶良、鎮懐石を詠む一首短歌を并せたり」

とある作品は次のように詠われている。

1) 懸けまくは あやに畏し 足日女 神の命 韓國を 向け平げて 御心を
鎮め給ふと い取らして 香ひ給ひし 真珠なす 二つの石を 世の人に 示し給ひ
て 萬代に 言ひ継ぐがねと 海の底 沖つ深江の 海上の 子負の原に み手づから
置かし給ひて 神ながら 神さび坐す 奇魂 今の現に 尊きろかむ

巻五―八一三 作者 山上憶良

〔解説〕言葉にかけるのはきわめておそれ多い。息長足日女の命の神さま(神功皇后)が、から国(新羅)を平定して、懐妊をしずめられると、手に取られて、清め祭られ

た、玉のような二つの石を、世の中の人に示して、永久に語り継ぐようにと、深江の海のほとりの子負の原に、御自分で置きなされた、神々しくあるくしき、み魂のこの石は、今の時代においても 尊いことである。

2) 天地の共に久しく 言ひ継げと 此の奇魂 敷かしけらしも

卷五―八一四 作者 山上憶良

右の事、伝え言ふは、那珂の郡伊知の郷養鳥の人建部牛麻呂なり

〈解説〉

天地のある限り、永久に言い継げと、この御魂みたま(鎮懐石)をお置きになったらしい。この事、伝え言ふは、那珂の郷養鳥の人建部牛麻呂なり。

○鎮懐石八幡宮御實記などによると、「神功皇后は懐妊のお身体でこの地を通過して、朝鮮半島へ向われた時に、卵形の美しい二個の石を求めて肌身に抱き、鎮懐として出産の延期を祈られたのであった。願いは叶って帰国後宇美の里で、応神天皇をご安産された。そこで、神功皇后が経尺の壁石(たまいし)を、子負ヶ原の丘上にお手ずから拝納されてより、世人は鎮懐石と称してその奇魂(くしみたま)を崇拜するようになった。」と記されている。

○鎮懐石八幡宮の創建は社伝等によると天和三(1683)年で、祭神は神功皇后(息長足日女命)、応神天皇(八幡大神)、武内宿禰の三神が祀られる。

○鎮懐石八幡宮の本殿に上がる丘の中腹地・海拔約20mにある同神社の「展望所」からは、眼下に玄界灘が開け、天気の良い日には遠く(約50km)離れた「老岐の島(長崎県)」をはじめ多くの島々が玄界灘に浮かぶ壮大な風景が展望でき糸島市西部の景勝地といわれており、この万葉集の序文にある『……海に臨める丘の上に二つの石あり。』とある古代の風景がそのまま今に引き継がれているのではないかと思

われた。

【写生地】

●鎮懐石八幡宮中腹地にある『展望所』から眼下に続く参道及びその奥に開ける玄界灘と海上に浮かぶ「姫島」を描く。



●「姫島」は鎮懐石八幡宮から約10kmの沖合にあり、幕末の女流歌人・野村望東尼（のむらぼうとうに）が長州藩士・高杉晋作などの勤王の志士をたびたび匿った罪で流刑になった島として有名である。

（池田杏花）

(参考文献)

- 「万葉集を知る事典」尾崎富義・菊池義裕・伊藤高雄共著 東京堂出版
「九州の万葉」福田良輔著 桜楓社
「鎮懐石八幡宮社伝」他